

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

荷田春満と日本語音調史の研究

| | |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-07-26 キーワード: 作成者: 中村, 明裕 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/0002001777 |

要旨 荷田春満と日本語音調史の研究

中村 明裕

本論文の目的は、国学の始祖とされる^{かだのあづまきろ}荷田春満(1669-1736)の遺した資料を分析して、それに反映された日本語の音調を明らかにし、あわせて日本語学史上における春満の位置づけを与えることである。春満は近世中期の国学者である。賀茂真淵の師であり、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤とともに国学の四大人の一人とされる。

従来、春満の言語研究についてはその著書が刊行されてこなかったために広く知られてこなかった。春満を祭神として祀る^{あづまきろ}東丸神社(京都市伏見区)が蔵する春満とその門人による語彙集の類が2009年に『新編荷田春満全集 第11巻 語彙・アクセント資料』(以下『全集』)として翻刻・刊行され、世に知られるようになった。

春満の資料に対する音調面における研究には、これまで『全集』に収められた川上蓁(2009)「荷田春満のアクセント理解」がある。また、日本語学全般に関しては同書に収められた諸星美智直(2009a)「日本語学史における荷田春満」および諸星(2009b)「本巻所収 語彙・アクセント資料の書誌」がある。いずれも全集の解説という性質上簡潔なものであり、より詳細な分析が必要である。

春満と近い時期の日本語の音調の資料としては『平家正節』を中心とする平曲譜本がよく知られている。平曲譜本に対しては奥村三雄(1981)『平曲譜本の研究』や上野和昭(2011)『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』があり、この時代の音調はかなり詳しく明らかになっている。しかしながら、平曲譜本はあくまでも譜面であり、音楽上の表現を考慮に入れなければならない。それに対し、春満の資料は量の面では平曲譜本には及ばないものの、音楽的な表現を考慮に入れる必要がないという利点がある。また、春満という生没年も生育環境も明らかな個人のアクセント体系を反映するとみられるという点でも注目すべきである。そのため春満の資料はアクセント史の上で重要なマイルストーンとなりうるのである。

音調以外についても、春満の学説全般に対しては、早くより三宅清(1940)『荷田春満の神祇道学』(のち1942年に『荷田春満』、1980年に『荷田春満の古典学』第1巻として再版)、同(1984)『荷田春満の古典学』(第2巻)といった詳細な研究が行われている。しかしながら春満自身の日本語研究の詳細は、刊行されたものが少ないためにあまり世に知られてこなかった。殊に語釈や音調資料の詳細は『全集』が刊行されることで初めて知られる

ようになり、詳細な分析が可能になった。

本論文は大きく分けて第 1 部と第 2 部とから成る。第 1 部では春満の資料に反映された音調体系・アクセント体系を明らかにする。第 2 部では春満の言語研究について、音調研究以外の側面を検討する。以下、各部の研究課題および各章の梗概を述べる。

1. 第 1 部

1.1. 第 1 部の課題

本稿の第 1 部の課題は、春満の資料が反映する音調がいかなるものであるかというものである。諸星（2009a、p. 432）は、春満の資料について次のように述べている。

これらアクセントが春満に古辞書や声点のある『日本書紀』など典籍の写本を披見する機会があって中古のアクセントを個々に考察の上アクセント集として著述したものなのか、春満自身の近世の例えば京都アクセントによって示したかについて、詳細の解明は今後の課題である。

この問題に対する本論文の解答は、「春満自身の近世京都アクセントである」というものである。川上（2009、p. 440）はすでにその一部を「春満時代の最先端のアクセント」と述べており、それ以外の部分も近世語として扱っている。本論文のこの結論自体は川上の主張の追認であるが、本論文ではより細部に立ち入って検討する。すなわち、平曲譜本等の春満に近い時代の資料を中心に、前後の時代の資料との比較対照を行い、春満の資料に反映された音調体系を明らかにする。体言を中心として春満の表記法が表す音調型・アクセント型を明らかにしたうえで、活用や複合アクセント規則についても分析を加える。

春満のアクセント資料は各章で詳しく述べるとおり近世京都のアクセントをかなり正確に写しているとみることができる。たとえば、春満の資料では 2 拍体言の第 2 類と第 3 類とはまったく区別されていない。これは、春満のアクセント資料が南北朝時代の体系変化が既に済んだ近世のアクセントを反映していることを示している。

1.2. 第 1 部の各章の梗概

第 1 章および第 2 章は全体のイントロダクションである。

第 1 章「日本語音調史一瞥」は日本語の音調およびその歴史についての概説である。この章ではまず、本論文で用いる共時的・通時的概念と用語について述べる。本論文では方向観による表記を採用し、[で上昇、] で下降、[[で拍内上昇、]] で拍内下降を表す。その上

で、京都方言を中心とする日本語の音調の歴史について、これまでの先行研究で明らかになっていることの概要を整理・記述する。京都方言の音調史を、南北朝時代の体系変化を境に大きく古代と近代に大別し、さらに古代を前院政期・院政期・鎌倉期に分け、近代を室町期・近世期・近現代期に分ける。次いで京都方言以外の音調史について述べる。最後に文献による京都方言の音調の研究史をおおまかにまとめる。

第2章「荷田春満について」は、荷田春満という人物についての概説である。荷田春満の伝記に対する研究史をまとめたうえで、春満の生涯についてこれまでの研究で判明していることの概要を、江戸に出るまでの時代、江戸在留の時代、江戸・京都往復の時代、京都での晩年、没後に分け、時系列に沿って述べる。ただし、春満の研究領域は非常に多岐にわたるが、主として春満の言語研究者としての側面を中心に述べる。

第3章「第一種表記法」では、春満の資料のうち第一種表記法の表す音調を検討する。春満の音調資料には、第一種表記法と第二種表記法との二種類の表記法がみられる。第一種表記法は語全体に〈平声〉〈上声〉〈去声〉を当てるものであり、第二種表記法は各拍に〈平声〉〈上声〉〈去声〉を当てるものである。

第一種表記法については、「上声は高起式無核の型を、平声は高起式有核の型を、去声は単に低起式の型であることを示すのみである」（川上 2009, p. 443）とされてきた。しかし、第二種表記法で記された資料と照らし合わせた結果、「〈上声〉は H1 型以外の高起式の型を、〈平声〉は H1 型を、〈去声〉は低起式の型を示す」と改めるべきであることが明らかになった。

また、第一種表記法で記された春満によるアクセント資料を類別語彙と比較すると、顕著な対応を示す。これにより、近世京都のアクセント資料として信頼できるものであることが明らかになった。

第4章「第一種表記法補説」では、春満の第一種表記法について、第3章で論じ残した諸問題について論じる。

春満の資料は副用言等のアクセントを知るには有益であるが、付属語について得られる知見はあまりない。しかし、終助詞の「か」に施された〈去声〉の注記は、疑問文の文末の上昇イントネーションを示しているものと見られ、珍しい。

第一種表記法には漢語で記されたものと和語で記されたものがあり、前者の「平声」「上声」「去声」は後者の「ひら声」「かる声」「める声」にそれぞれ対応することを示した。『日本書紀語釈稿』の前半部分のアクセント表記法（第三種表記法）は、おおむね第一種表記法

に似るが、高起式有核型の場合は「上二言上声下一言平声」のような形で有核であることを示すこともある。

春満の著作中にはアクセントについて断片的に言及した部分もあり、それもアクセント史の資料として有効である。

契沖の第一種表記法について、〈上声〉を「高平調」、〈平声〉を「下降調」とする金田一春彦（1943=2001）「契沖の仮名遣書所載の国語アクセント」（『日本語音韻音調史の研究』所収）の解釈は2拍以下の語に限られるものであったが、3拍以上の語にも適用されることで誤解を招いてきた。契沖の表記法も春満同様、〈上声〉はH1型以外の高起式、〈平声〉はH1型を表す可能性が高いことを主張する。

第5章「第二種表記法」では、春満の資料のうち第二種表記法の表す音調を、体言を中心として検討する。第二種表記法は第一種表記法よりも詳細に音調型を推定することができる。春満の音調資料における第二種表記法にはいくつかの形式があるが、「並平声」などと記述することによってそれぞれの拍に〈平声〉〈上声〉〈去声〉を当てるものが主である。

第二種表記法においては、〈平…平〉はH1型、〈上…上〉はH0型、〈去…去〉および〈去…上〉はL0型を表す。〈上…平〉は高起式、〈去…平〉は低起式の有核型を表し、〈平〉によって核の位置を示している。少数ではあるが例外的な注記も存在する。

低起式音調についてはおおむね2拍目から3拍目にかけて上昇していたことを示すとみられるが、例外もある。現代方言の「阿南型」に近い体系を有していた可能性があることを示した。

第6章「複合名詞のアクセント——和田実の複合アクセント法則を中心に——」は、第二種表記法の資料に基づいて春満の複合名詞（全154例）のアクセントを検討する。

式保存は成立せず、多くは高起式である。低起式の複合名詞（26例）は、多くは南北朝時代の体系変化以前に1拍目から2拍目にかけて上昇があったために、南北朝時代の体系変化の影響を被らなかったものである。

後部要素に2拍体言第1類・第3類・第4類を持つ4拍の複合名詞は、和田実の複合アクセント法則に従うことが多い。すなわち、後部要素が第1類ならば-3型、第3類ならば0型、第4類ならば-2型になるものが多い。第2類・第5類は例が僅少なため不明である。第1類動詞から転成した2拍の転成名詞を後部要素に持つ複合名詞は、0型が多い。これも和田の指摘に合致する。

和田法則は春満と近い時代の『平家正節』にはみられないとされるため、春満の資料は現

在知られている中で和田法則が反映された最も古い文献資料ということになる。

2+3 の構造を持つ複合名詞は H2 (-4) 型が多く、H4 (-2) 型がこれに次ぐ。H2 (-4) 型の複合名詞は多くが南北朝時代の体系変化以前に*○○-○[○]○型だったと思われるもので、それが規則的に変化した型と考えられる。H4 (-2) 型の複合名詞は多くが南北朝時代の体系変化以前に*[○○-○○]○型だったと思われるもので、これをそのまま受け継いだものと考えられる。

第7章「用言のアクセント」では、第一種・第二種両表記法の資料に基づいて、春満の用言のアクセントを検討する。おおむね『平家正節』に反映されたものに近い、近世京都方言のアクセントとしてふさわしいものとなっている。

揺れが多く解釈に困る部分も多いが、用言に揺れが大きいことも『平家正節』に似る。また、春満の資料には、『平家正節』等の他の近世の資料では得ることが困難な口語形のアクセントを窺うことができるという利点がある。春満の資料に現れる口語形には、意志推量形の「開コ」、完了の助動詞のついた「開イタ」、四段活用の使役の助動詞の「飽カス」がある。

第8章「第二種表記法補説」では、春満の第二種表記法について、ここまでの章で論じ残した諸問題について論じる。副用言や付属語など、体言・用言以外の語のアクセント、多単位形の見出し語の問題、誤記や破損のために採らなかった例について述べる。

副用言に関して、「ア」や「アア」を音調を変えて発音することで様々な感情が表現できることを春満は述べていて興味深い。第二種表記法の資料においては、多単位形中に現れる助詞から、助詞のアクセントを多少窺うことができる。

第二種表記法の限界から、多単位形の見出し語に対する注記からアクセントを推定するには多少の注意が必要であるが、ある程度推定可能である。

第9章「方言声点資料について」では、春満の手によるものとみられる、東部方言を含む方言の語彙を声点付きで記録した断簡3葉（「方言声点資料」と呼ぶ）について論じる。

声点が差された語は全部で21語であり、上総国、遠江国、土佐国等の方言を含む。この資料から、当時の東部方言の音調体系について、上総方言は少なくとも、[○○、[○]○、[○]○○、[○○○○、[○○○○○]という音調型を有しており、遠江方言は少なくとも、[○]○、[○○○、[○]○○という音調型を有していたことを推定する。また、上総方言および遠江方言は、1拍目の前で上昇する {[○○-} という句音調を有していたことを推定する。また、遠江方言には3拍の形容詞について少なくとも2つのアクセント型があり、アクセントの違いによるミニマルペアを有していたと考えられる。その2つのアクセント型の具

体音調は[コスイと[コ]スイという型であったと推定する。

京都方言の音調史は、院政期の『類聚名義抄』、鎌倉期の『四座講式』、室町期の『補忘記』、近世期の『平家正節』といった大部の資料が揃っているのに対して、それ以外の方言はこうした資料が乏しいため、貴重である。

第 10 章「荷田派の音調研究」では、春満以降に、その後を継いだ荷田派や荷田派以降においてどのような音調研究が行われてきたのかを論ずる。

春満ほどの質・量を備えたものはないが、荷田信名、荷田在満、大西親盛、賀茂真淵、本居宣長による記述がある。信名や在満、そして後の真淵や宣長といった国学者は、契沖や春満の音調理解を忠実に継承しており、似通った音調観を共有している。近世国学において、他の研究領域の華々しい深化にも関わらず、音調研究は春満より後には目ぼしい発展を得られなかったことを述べる。

この章には付録として東丸神社蔵『名目鈔』(A 本)の声点一覧を付す。

2. 第 2 部

2.1. 第 2 部の課題

本稿の第 2 部の課題は、日本語学史上における春満の位置づけである。上田賢治(1981=2005)『国学の研究 草創期の人と業績』は、「神典による神道の研究、及び国文学(歌文の研究)」が春満の中心的な学問分野であるとした上で、有職学・法制史・国史学・国語学の諸領域が春満の中心的な学問分野と言いがたい旨を述べる。その中で、「詳しくは、専攻者の更なる研究を待たなければならないが、やはり、当面、春満を国語学者として性格づける必然性はない、と見て良いのではないだろうか。」(p. 151)と述べている。

春満を国語学者(言語学者)として性格づけるべきかというこの問題は多分に価値判断を含むから、明確な判断を下すことはできない。契沖、富士谷成章、本居宣長、本居春庭のような本格的な言語研究と比べれば、確かに春満の言語研究は目立たない。しかしながら、本論文の第 1 部で示すように、春満の音調研究は近世国学者によるものの中で最も精確で豊富である。また、春満は古語から方言や俗語にまで及ぶ記述を行っており、何よりも『創学校啓』に現れる春満自身の自負を考え合わせると、春満を国語学者(言語学者)として性格づけることは必ずしも無理ではないと思われる。本論文では春満の言語研究を、春満の学問の中心的な側面の一つとして積極的に認めたい。

春満は『創学校啓』の中で「古語通ぜずんば、則ち古義明かならず、古義明かならずんば、

則ち古学復さず。先王の風迹^{あとの}を払ひ、前賢の意荒^{すま}むに近きは、一に語学を講ぜざるに由る。これ^臣が終身精力を古語に用み^{ゆゑ}尽す所以なり」(原漢文、訓読は『日本思想大系』本 p. 336 による)と述べており、春満自身は言語研究を自らの研究の中心と考えていたようである。また、賀茂真淵は『語意考』の跋で「(前略) 荷田東万呂のうし、千よろづの古言をかゝなへるによつて、世の人のいまだこころ得ざりしこととを得て、ことゝふ人に伝へしを、おのれもいさゝけばかり聞つ」(『日本思想大系』本 p. 418)と述べており、国学の基礎を確立した真淵にとっても、師・春満は言語の研究者として意識されていたと考えられる。

2.2. 第2部の各章の梗概

第11章「『日本音義』について」は、春満とその門人によって編纂されたとみられる漢文体の語彙集『日本音義』について述べる。

『全集』所収の「語彙集断簡 天部」や、東丸神社所蔵の『全集』未収の草稿が『日本音義』の一部分であることを立証し、現存の『日本音義』の全体像を明らかにする。そのうえで『日本音義』に現れる形態論的記述について論じ、国学における文法意識の萌芽として注目すべきものであることを述べる。

第12章「『日本音義』の仮名遣い——春満が契沖の学説を受容したのはいつごろか——」では、『日本音義』の仮名遣いを通じて春満が契沖(1640-1701)の仮名遣い説を受容した時期を推定する。

『日本音義』の見出し語の万葉仮名では、定家仮名遣いと契沖仮名遣いの折衷というべき仮名遣いが用いられている。『日本音義』において /オ/ には、「於」「遠」「乎」の三種(語頭以外では「保」「不」も)の仮名が用いられている。契沖仮名遣いで「お」と表記されるものは定家仮名遣いに関わらずおおむね「於」と表記される。契沖仮名遣いでも定家仮名遣いでも「を」と表記されるものはおおむね「遠」と表記される。契沖仮名遣いで「を」と表記され、定家仮名遣いで「お」と表記されるものは、おおむね「乎」と表記される。これは春満が契沖の仮名遣い説に触れ、定家仮名遣いと契沖仮名遣いの折衷を企図したものと考えられる。

『日本音義』は宝永5年9月1日(1708年10月14日)に起筆されたものであり、これに契沖の仮名遣い説の影響がみられることから、春満が契沖の学説を受容した時期の下限をこの日に設けることができると主張する。

第13章「『伊勢物語童子問』における仮名遣い論」では、春満の著書『伊勢物語童子問』を通じて、春満が仮名遣いに対してどのような見解を持っていたかを論じる。

定家の仮名遣いを名指して強く批判しており、契沖の名に直接は言及しないが、その仮名遣い論を大幅に取り入れているとみられる。特に『和字正濫要略』を参考にした可能性が高い。その一方で、春満のオリジナルの仮名遣い論もある。契沖の説と対立する部分もあり、契沖よりも春満の方が正しい部分もある。また、春満は『真名本伊勢物語』の仮名遣いの誤りを指摘しつつも、その大部分に強い信頼を置いている。

3. 付録

本論文には2編の付録を付す。

付録1「荷田春満の音調資料索引」は、本論文の第1部で扱った春満の音調資料の五十音順索引である。

付録2「『日本音義』補遺」は、本論文で資料の一つとして用いた『日本音義』のうち、『全集』に収められていない部分の翻刻である。